
未来の陽

日之陰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来の陽

【Nコード】

N6721F

【作者名】

日之陰

【あらすじ】

もはや未来なんてない。野垂れ死ぬのを待つばかりだった二十二歳無職独身は、ある晩、死体遺棄の現場を目の当たりにする。偶然道で一緒だった中年サラリーマンと共に監禁され、半ば自棄になって死を受け入れた「俺」の辿る運命とは――。

明るい未来など望めそうになく、もはや俺はどうしようもないほどに落ちこぼれていた。

成績優秀で明朗快活だった少年は、中学卒業あたりから徐々に、あらゆることにヤル気が出せない無気力ダメ人間へと変貌した。特に理由もなく。

高校時代は不登校続きで中退し、親から何度も泣きつかれ、それでも怠惰な日常を改めずにいると、ある日ついに勘当を言い渡された。

親に恨みはなかった。

元が取れそうにないごくつぶしなど無価値に他ならないの当たり前だろう。

そう割り切っていたから家を出た。無謀な一人暮らしの始まりだった。

案の定、俺みたいな人間が独りで生きていける訳がなかった。まともな就職口を探す気は起こらない。バイトは続かない。

そしてどこからも仕送りはない。最後に親から頂戴した絶縁状代わりの金子封筒はやがて厚みを失っていき、ほどなくして空になってしまった。

水道光熱費に続いてアパートの家賃も払えなくなり、いよいよ然るべき時が近づいてきているのを自覚し始めた二十二歳無職独身。

けれども。

残された時間は思ったよりずっと短かったんだ。

目隠しに加え、両手両足を縛られたのは初めてだった。動けない。何も見えない。圧倒的な束縛感。

そんな状態で放置されて数分経った頃、乱暴にドアが開く音がし、何人かが荒々しく入ってきた。

「オラ、ここで待ってる」

座っていた俺の隣に誰かが押しやられる。うめき声からして、どうやらさっきの中年サラリーマンで間違いないようだ。

死神に見そめられた、もう一人の不運な男。

重々しく戸が閉まり、俺とその中年リーマンは二人きりで取り残される形となった。

彼はもそもそとうごめき、その拍子に俺の足に触れた。頼りなく「ひっ」と声上がる。

「だ、誰かいるんですか？」

中年リーマンはおどおどした口調で不安げに声を上げた。年上の癖に、えらく頼りなさげな社会人だ。

「さっきはどうも」

俺は無愛想に返答した。

「あつ、そ、その声はさっき道で一緒だったお兄さんですね？ な、何で私達は、こんなことになっているんですか？」

状況が全く把握できてないことに苛立ちを覚える。

「運が悪かったからだよ」

「な、何ですって」

「俺とアンタは偶然同じ道を歩いていて、偶然物音を聞いて、偶然見てしまったんだ」

「な、何を……？」

「男が二人がかりで運ぶようなぐるぐる巻きのマットをだよ。見られちゃマズイような！」

中年リーマンはようやく推測が立つたらしく、口をパクパクさせるような音をたてた。

「そ、そそ、それじゃあやっぱり……」

「それしかないだろうが。——だからあのとき俺はさっさと逃げ出したんだ。先に捕まったけど」

「ここ、これから私達、どうなるんですか」

「殺されるに決まってんだろ！」

イライラをぶちまけるように答えると、中年リーマンは奇妙な叫び声を上げた。彼がいくら騒いだところで誰も助けには来ない。

猿ぐつわなんかを付けられて無いことから、室内に防音設備が施されているに違いない。

持ち物は着衣しているもの以外全部没収されているし、縛られた両手足は指を出す隙間すらない。

ドラマでよくある救出劇・脱出劇など所詮はフィクションだ。現実はいつだって非情。

やがて中年リーマンは黙り込んだ。きな臭い個室に荒い息遣いだけが響く。

「どうして君は、そんなに落ち着いていられる」

不意に彼が訊いた。

「別に……。丁度いいかなと思ってるだけ」

「なんだって」

「昨日、完全に貯蓄が尽きたんだよ。生活費。だからどうせ野垂れ死ぬとこだったし」

自棄だった。どうにでもなれだった。これからの運命を受け入れる覚悟はとうに済んでいた。

「——お兄さんはどうしてあんな時間に外を出歩いていたんですか」
会話でもないし精神がもたないのだろう、別に善意はなかったが付き合ってやるとする。

「——大家在押しかけてくる時間を立ち読みで過ごしてただけだよ。」

その帰りにコレ。おっちゃんは？」

「私は今日、会社で昇進が決まったんです。同僚が祝ってくれて――飲みの帰りにこんなことに――」

「そりゃ極め付けに運がなかったね。可哀想だね」

俺はせせら笑った。全てがもうどうでも良かった。

「――お兄さんは今、何歳ですか」

「――二十二だよ」

「まだ若いじゃないか」

急に中年リーマンの口調が変わったもんだから、俺は思わず目隠しされた顔を上げてしまった。

「私は……私は君の倍以上生きているのに、こ、こんなところで一緒に、お、終わってしまうなんて、あっあんまりじゃないかつ！」

俺は思わず嘔き出してしまった。

「おっちゃん、若いっただってもう成人だぜ。それに俺は親に勘当されたダメ人間の落ちこぼれなんだよ。

それも全部、俺が悪いんだ。わかる？ 全部自業自得。だから死んだってどうせ……」

「何を言ってるんだ君は！」

中年リーマンの鋭い声が響き渡った。勢いに押された俺は仰け反った。

「さ、さっきから君は、やけっぱちになっているみたいだね、君だって……君だってまだ、私にはもう望めない、大事な物をもっているじゃないか」

「もう死ぬんだから無駄だって」

「君に今まで何があったのか知らない、」

「何もないよ」

「君が今までどんな過ごし方を経たのか知らない、」

「毎日が土日だったよ」

「けど君にはまだ、かけがえのない……」

そのとき、出し抜けにドアが開いた。二人して思わず口を閉じる。
「いやいやお待たせしましたネ」

やけに威厳のある、落ち着いた声が降りかかる。

死体遺棄グループのボスだ！ そう直感した。

「何をしているのです。早く縄を解いてあげなさい」

ボスが合図すると、小気味良い返事と共に何名かが俺とおっちゃんに取り付いた。

目隠しを外され、ここが廃品倉庫であることが分かった。

そして。背広姿でサングラスをかけた細身の、しかし貫禄のある男が眼前に立ちはだかっていた。

後ろに控えている人間は予想を裏切らず、全員素敵な人相をお持ちだった。

そんな場面で、真っ先に口を開いた人物がいた。

「お願いします！　どうか助けてください！」

おっちゃんだった。土下座での悲痛な嘆願だった。そうだ、誰だって手前の命は惜しい。

特におっちゃんは昇進を決めたばかりで、帰るところが――

「このお兄さんだけは助けてやってください！」

俺は初めておっちゃんを直視した。

思ったよりも小柄で、喧嘩すれば楽に勝てそうだった。あと、汚れた衣服と禿げた頭。

「このお兄さんは、まだ、若いんです」

何をほざいているんだこの中年ハゲは。

「このお兄さんには、このお兄さんには、まだ、」
全身震えてんじゃねーか無理すんなよハゲ。

「『未来』があるんです！」

あーあーもう何泣き出してんだよ、見てる俺まで恥ずかしい。見てる俺まで、おい。

「幸せな……未来は……！」 「未^まだ……『来』てないんです……」

俺は上体から倒れこみ、咽び泣いた。涙が止まらなかった。

俺は何の取り柄もなく、努力すらないダメ人間で、だから生きてる意味なんてなくって、だから、こんなことを言われたことなんか無くて。

「もういいよ、おっちゃん。もう俺、じゅーぶん」

俺はその狭い背中をさすった。どちらのものかも分からない振動が、一つの決意が漲らせる。

そのとき俺は実感した。人間って他人の為に命が張れる生き物なんだなー、って。

「あのっ、俺っ、」

「そこまでだヨ。もう、それ以上はイイ」

一部始終を目の当たりにしていたボスが、膨らんだ懷に手を突っ込む。かさばってる裏ポケットに。

ああ、そうか。やっぱダメか。無理か。そっか。

未来の光は閉ざされる運命か。あーあ。

でも、せめて、おっちゃんだけは助けてやってくんねーかな。

「いいもの見させてもらったヨ。——だけどこれ以上見せられたら、

流石の私も涙がチヨチヨ切れヨ」

封筒が眼前に突き出される。二つ。結構厚みがある。万札が詰ま
つてたら百万くらいかな。

「——え？」

「いや、本当に申し訳なかったネ。これは口止め料として受け取っ
て欲しいのヨ」

「え？ え？」

「どうもウチの若い衆に時代錯誤の人間がいてネ。今の時代、口封
じだなんて古臭い慣習なんてもうないのヨ。

裏の仕事をアナタ達力タギの人間に見られたのは確かにマズかつ
た。でもこれはこちらのミスなのネ」

助かるのか。俺は。俺達は。

「ぶつちやけるとネ。仮にアナタ達が目撃証人として訴えたとして
も、こっちは裁判で絶対勝てるようになってるの。

いま、その時担当する弁護士に話をつけたとこ。少々時間がかか
ってしまっただけネ」

おっちゃんと俺は顔を見合わせる。

「や、別に訴えて欲しい訳じゃないから、今話したことも含めて全
部なかったことにしてネ。だからこれはその口止め料」

俺とおっちゃんは封筒を受け取る。重い。札束の中身を一瞥する
と、諭吉様がわんさかいらっしやった。

「今日は済まなかったネ。じゃ、も、帰っていいヨ二人とも。あ、
何だったら家まで車で送らせるヨ」

ボスの申し出を丁重にお断りして、俺とおっちゃんは並んで歩い
ていた。

その折、色々な話をした。おっちゃんもかつては引きこもりのダ

メリットだったこと。

自分を支えてくれる人と出会い、どん底から引き上げてくれたこと。

今の自分が幸せな未来をつかんでいるのは、全部その人のお陰であること。

「その人はね。身体を張って私を、今私が勤めている会社に斡旋して下さったんだよ」

それが影響で、あんな行動を取るに至ったのか。

でも、本当の命を懸けたおっちゃんの方が百倍カッコよく感じる。「そんなことはないよ。さっきのは、どの道、助かっていたでしょう」

結果はどうあれ、俺にとっておっちゃんはヒーローだよ。未来に繋がる今を得ることができた。ありがとう。

「——私が思うにね。人の未来ってのはこんな風に誰かに助けてもらって、そして誰かを助けてあげて、

そういう連鎖が続いて繋がっていくものじゃないかな。うん、きっとそうだ、今回の件で確信したよ」

それじゃあ、俺もいつか、誰かを助けることになるのかな。こんな俺でも、誰かを助けられるのかな。

「君なら絶対できるとも。未来を得た君なら」

おっちゃんは俺と別れる際、もう遠く離れているにも関わらず手を振り続けていた。

その姿が完全に見えなくなると、俺は足取り軽く家路についた。別にポケットに大金が無かったとしても、きっと俺の胸は弾んでいるに違いなかった。

時刻はもう明け方に差し掛かっていて、閑散とした町並みが新たな一日に染められようとしている。

東の空に朝陽が頭を見せる。

溢れんばかりに燦然と光を放つそれは、まるで俺の心の中に描かれた、未来への道しるべそのものだった。

（後書き）

初投稿です。

昔執筆した作品に加筆修正を施し転載しました。
ともかく書き上げるのに必死で、創作の大変さを改めて痛感しました。

最後まで読んで頂き、深くお礼申し上げます。

処女作なので感動もひとしおです。

これからお付き合い頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6721f/>

未来の陽

2010年10月19日21時40分発行